

「アガベ」(題字・伊藤博胤)

 日本社会事業大学
Japan College of Social Work

アガベ

日本社会事業大学同窓会北海道支部【(2017年7月7日発行 第19号)
(事務局・仁木町大江2-457大江学園内 0135-32-3662)

【社会福祉随想リレー】

社大創立70周年記念「障害者福祉の立場からの検証」その2

字部9期 木村 昭一 (はるにれの里理事長)

その後、職員集団との学習を積み重ねる中で、まず第一に彼らの自閉症者としての障がい特性をしっかりと理解すること、さらに、一人の人間としての個性を大事にすることを基本にして、彼らが日々暮らしている生活環境をいかにわかりやすく、過ごしやすくすべきか。科学的な根拠に基づく根本的な見直の取り組みが始まりました。

その結果、集団生活を前提とした入所施設では、彼らの笑顔は見ることは極めて困難と結論付け、一人ひとりにとっての小さな暮らしを実現しようとなりました。そして実は、その小さな暮らしが地域の普通の暮らしにあったのです。さらに、自閉症者の特性に配慮された構造的な支援が極めてスムーズに実践に移され、その成果が明らかとなってきたのです。

こうして、「行動障がい激しければ激しいほど、地域の小さな暮らし、地域のグループホームに移行させよう」ということを合言葉として、実践を進めてきました。その結果、多くの自閉症者が落ち着きを取り戻し、行動障がいは少なからず改善していったのです。

以来15年間、実践を続けてきた結果、今日では札幌市周辺に35ヶ所、150人(障がい支援度平均区分5.5)が地域生活をエンジョイしています。

2. 自らの社大生としての検証



1) 社会人としての目覚めと社大生ならではの社会問題に対する関心の高まり

当時のすべての大学がそうであったように、社大でもまた社会に飛び出すべく心構えを教えてもらったわけです。とりわけ社大は、様々な社会的な問題を抱えている対象者を支えるというソーシャルワークの宿命から、その社会問題への意識は高まらざ

るを得ませんでした。

私は、学生時代から社会的な運動（朝日訴訟など）に飛び込むという体験を通して一層、社会福祉を社会的な問題として捉えていくという自覚が高まってきました。このことは、最初に就職した公的福祉の限界を知り、見限る動機ともなり、何よりも、次に転職した当時、非権利状態に置かれていた「動く重症児」と言われていた、今でいうところの「強度行動障がい児者」の施設に飛び込む動機でもあったのです。

2) 人間理解の深まり

前述したように、社大における教えは、徹底した対象者の立場に立って考える思想を植え付けてくれました。そこから生まれたものは、社会福祉対象者の置かれている立場は決して個人の責任にしてはならない、観念的にもこうした考え方が4年間でしっかりと植え付けられたような気がします。

いかなる重度障がい者、とりわけ理解が苦しむような様々な不適応行動を併せ持って成人期を迎えてしまった重度自閉症者への理解についても、自閉症者である前に一人の人間であるという視点、今でいう障がいを医療モデルから社会モデルで考え、支えていくということについては、一貫して崩れることがなかったのは社大4年間に培われたものであったのです。

3) 権利としての社会保障

権利としての社会福祉の観点から、当時のノーマライゼーションの流れの中で、入所施設から地域生活に移行することは、彼らの、人としての尊厳の問題でした。

つまり、権利としての地域生活という考え方は、社大生ならではの発想からの具体的実践であったのです。

そのことがあったからこそ、私は社会福祉現場においてもこのことを一貫して実践できたのだと思います。

4) 同窓会の役割

地方での数少ない社大生のつながりから社大生ならではの社会福祉への思いを引き継ぐ役割を、同窓会は果たしているように思えます。

25年前、自らの仕事に消化不良気味の状態を同窓の先輩に相談することで当時の社会福祉の谷間におかれていた自閉症者支援に一大決意で、火の中に飛び込むことができたのも大先輩たちの後押しがあったからこそです。

社大には、他の大学にはない良さ、つまり、同窓生であるが故の強い繋がりがあると思います。そのことを同窓会はもっと推し進めていっても良いのではないのでしょうか。

(以下、次号をお楽しみに！)



「就活・全国フェア-in社大」を実施

昨年、「就活・北海道フェア」を初めて実施し、当初の予想以上の成果を挙げる事ができました。

そもそもこのフェアは、3ないし5年計画の初年度、パイロット事業という位置付けをし、村上会長、木村副会長を先頭に道内の同窓会メンバーと本学同窓会の協力を得て実施したものでした。

昨年は、同時開催されていた同窓会幹事会に於いても「来年は是非、一緒に遣りましょう」と他県に共催依頼をした結果、今年度よりは同窓会が主催者となって実施するという経過があります。

道同窓会としては、今年の3月段階から同窓会員や道内の社会福祉関係者に呼びかけを行い、求人票の集約をすると共に、当日の参加についても協力依頼してきました。結果、求人票は20件以上集まり、当日の面談参加者も施設長クラスを中心に6人となりました。

また5月の後半よりは、同窓会の協力により、A棟ロビーに於いて、「北海道にお出でよキャンペーン」を行っていました。これは、昨年作成した北海道大地図や実施チラシなどをパネルに貼って掲示すると共に、北海道や道内自治体の観光パンフ、卒業生の就職リポートなどを机に配置して配布するというものでした。

さて、6月24日(土)は、社大学内に於いて、社大福祉フォーラム(学内学会)と同窓会幹事会が行われている中、A101教室に於いては、9都道府県が共同して机を並べ、標記を実施しました。

フェア自体は、11時半よりの見世開きとなりました。初めはほぼ学生の姿はなかったものの、昨年に引き続き、金子教授が集客の手立てをしてくれたため、会場内では各県ごとに学生が次々に集まってきました。

北海道ブースにも道内出身の学生を含め、「地元に戻りたい」、「北海道には興味がある」などの学生が来てくれました。みなとても熱心に道メンバーと話し合いをしており、中には「北海道に戻って就職したいので、夏休み期間中に施設見学をしてみたい」という3年生もいました。

初日の「フェア」は、16時30分に終了しました。

その後、昨年と同じ清瀬駅前の会場で、道同窓会員のほかに伊藤顧問や教職員も参加してくれ和やかな懇親会となりました。また、途中からは東京支部メンバーと合流して、予定の時間を超える盛大な懇親会を実施しました。

昨年のお阪に続き、今年は東京メンバーとお互いの交流を深めることができ、今後の様々な連携や交流についても話し合うことができたのでした。

翌25日の日曜日は、北海道の単独開催となったため、昼休みを中心にA棟ロビーを会場に、「就活・北海道フェア」を実施しました。

ここには、道内出身者の4年生が就職試験を終えて駆けつけてくれたり、昨年参加してくれた学生が近況報告に来てくれたりしました。また、前日も参加した1年生が北海道の

ことだけではなく、社会福祉を巡る様々な事柄を質問してくれたり、社会人経験のある3年次編入生が道メンバーと長時間に亘って熱く語り合う場面もありました。

14時終了を目処として時間設定をしていたため、最後は、道メンバ4人と机を挟んだ学生5人が、仕方なく解散を余儀なくされたほどの盛り上がりとなっていたのでした。

昨年の参加者15人に対して、今回は他県との共催であったにも拘わらず、結果としては、14人が参加してくれました。

内訳は、1年生1人、2年生2人、3年生7人、4年生4人でした。また、道出身者は5人、道外が9人でした。就職先もしくは関心分野は、高齢者4人、障害者3人、子ども6人、その他1人でした。昨年同様に、学年が上がるにつれて質問や意見の内容も充実していましたし、先に書いたように、1年生が社会福祉全般について様々な質問をしてくれたことは、我がメンバーをも大変に刺激してくれた、と云えます。

加えて、この中の数人とはMailアドの交換も行い、帰道後に早速連絡を取り合い、今後の繋がりもできる成果を挙げたのでした。

今後も、こうした粘り強い活動を、北海道から展開することで、同窓会を通じて、社大そのものが社会的使命を果たすことができるようにしていきたいものです。なおこの趣旨は、同窓会幹事会でも提案してあります。

同窓会幹事会出席報告……



村上、木村正副会長は忙しい中、学内学会にも参加して、社大の「現状」を把握していました。

また、土曜日には標記が開かれ、村上会長等が出席しました。

幹事会では、大橋会長の開会あいさつを受けて、今年は、理事長、学長がお出でになる間に各県の状況を報告する機会を得ました。

北海道は、村上会長の発議により4ページに亘る「同窓会活動強化のための提案」を提出してありました。これは、この間の「就活フェア」や高校生の進学支援を踏まえ、同窓会が今後、社大と手を携えて、「社大の歴史的使命を果たそう」という内容です。

特に具体的に、学生支援・卒業生支援を行ったほしいことから、以下の10項目の提案をしました。

①社大を受験希望する生徒の受験に関する県支部推薦制度の創設、②合格者が入学に際し、低所得者の場合は五味基金などを活用した入学等費用の支援、③学生の現場実習に関する県支部による積極的な受入れ体制の確立、④「全国・就活フェア」の毎年実施、⑤フェア実施に際し、社会福祉系他大学生への参加の呼びかけ、⑥フェア実施後の県単位での面接学生等へのフォロー、⑦学生が法人等を受験する際、旅費等を支給できる制度の創設、⑧学生の就職に関する大学当局による県支部もしくは県内法人等への推薦制度の創設、⑨学生の卒業後、社大自身による研修等支援体制の確立、⑩県支部単位での「日社大市民公開セミナー」の定期開催

これらを、社大自身が本腰を入れて粛々と実施して行ってほしいというのが、道同窓会の願いです。社大の現状を踏まえ、今後とも強力に働きかけていくつもりです。